あたら漂蕩の春秋を重ぬるこゝの、さても焦立たしかりしこゝよ、又いかにもぢかしかりしこゝよ。あはれ暮色蒼然たる曠野の間に立つて、行く方も知らぬ旅人の心景にも似た、いゝゞ淋しきものが長く久しく我が心の奥に巣うてゐるのであつた。仲々の念、悶々の情、輾々反側を重ねたこゝ、そも幾たびであつたか。思ふにまた世上この種の消息に通ずる人が少くないであらう。

衷に滞るものを解きほぐかなければ、止むこゝの能きぬのは、人性の常である。私は身の不敏を忘れて、覺束ながらにも獨り自らその迚々しき歩みを、志す道にゝ進むるのであつた。それは、さながら茫々たる宇宙をさまよふ巡禮のごゝくに。

かゝる折、身に餘る重荷を負うて旅路になやむ弱き私を見出し、之を援け、之を導き、切りに鼓舞奬勵して、幾たびか難透の重關を經せしめた後、始めて五十年來の宿志を遂ぐることを得せしめたのは、これぞ我が川合信水先生であつた。一死又再生、再死又三生、積年の雲霧こゝにからりと晴れ、重ねて又不安を懷くこゝなき落々たる身となり得て、不敏ながらも新たに見出した使命に向つて、この生を献ぐるの光榮ある道途に立つを得せしめられた至信至樂の境、何物の比ふべきものもない。この故に、私は全幅の精神を傾倒してこの人に感謝せざるを得ぬ。

○

誰かいふ、そは只一家の私事に過ぎぬと。思へ、一家の私事が、何で先進から後進に傳はり得ようや。一切を捨て果てゝ、未だ新たなる力を握り得なかつた秋に、疾くすでに一切處、一切時に超越した大なる物の持主であつた川合信水先生は、この身を導いて天下の廣居に立つこゝを得せしめたのである。見よ、東西の聖經は、人皆之を繙き得る。けれども、之をその身に體現してよくその證し人たり得る者は、如今果して何處にあるか。私は之を我が川合信水先生に於て見出し得たのである。

洵に先生は、郡是製糸會社の人達が仰いで之に師事するばかりでなく、何人でも之を求

めて止まぬ者に對しては、社の内外を問はず、寧ろその有てる凡てを與へ盡さなければ止まぬほどに、誨へて倦むことを知らぬ聖者その者である。果然、川合信水先生は、郡是製糸會社が提供した一椅子にその全身を没して、能事足れりとするがごとき人ではなかつた。知るべし、郡是製糸會社に對する寄與と貢献は、その人の有てる大なる力の發揮し行く一表現であることを。やがて又知り得よう。郡是製糸會社は、その設けたる椅子に先生を請じ得たのではあるが、その主人公は、有てる最善のものを同社に寄與する通りに、それと同じ心を以て、そのまゝ又縁ある天下人の前に、之を施すことを惜まないこころの、卽ち又天下人の共有する公人であることを。三たび知るべし、人の身に備はる力は、かくてこそ初めて完全に理想的の表現をなし得るものであることを。けれども、さらば何人が、先生を動かして、その淵默を破らしめ得るかは、人々又一段の心を用ふべき所である。

○

人は皆生かしめられて居る。だが、果して何人がよくその生を全うし得てゐるのであるか。その生かしめられてゐる間、多くの人々は皆相應に我がまゝな振舞をなしてゐる。又隨分勝手な熱をも吹いてゐるのである。しかも、人々は常に如何なる信念の上に立ち得てゐるのであるか、又いかに完き生活を營み得て居るのであらうか。見よ、多くの落伍者や敗殘者は、隨時隨處に頻出するではないか。中には、失望落膽の極、憐れにも亦醜き最後を遂ぐる者さへ毎々そこ此處に出現するのである。さうした圖を見せつけらるゝ度ごとに、人々は今更のごとくに胸を打つてその悲慘なる出來事に驚き、或はまた嘲笑をさへ放つことをなすのである。だが、翻つて自己今日の存在に顧み、地を易へて身をその境に置いたとする時、果して如何なる行動に出で得るの自信がありとするであらうか。俯仰天地に愧ぢぬはおろか、我今こゝに立つ、天よ我を見よ、地よ我に聽けとの大信念大抱負を以て、その生活を終始し得る者が、果して幾人を算し得るであらうか。見來れば、生きながら屍を横へてゐる者の、如何なればかくも累々たることであらう。『平地上死人無數』の語、今も古と異なるなきを嘆ぜしめらるゝのである。

あゝ、かくの如きは、人の志でもなければ、素よりまた天意であらう筈がない。しかも尙ほさうした境に漂うてゐるのは、その心を盡してその性を知らずこせず、徒らに流れ行く世相の蹤を追うて、只これ朝三暮四を繰返すに過ぎぬからではないか。

げに人は皆、喘ぎに喘いでゐる。但しそれは、何を爲さうこするのであるか。又何處に在らうこするのであるか、將た何處に往かうこするのであるか。

かりそめならぬ生をこの身に受けた以上、見ごこ意義ある生を遂けようこするのは、なべての人の志であらねばならぬ。さらば、その道は何處にあるか。之を尋ね究めて之を明かになし得た時、初めて人は限りなきの希望を懷きつゝ、その置かれたこころの道に大なる蹈歩をなし得よう。

さうした志ある人々の前に、この書が得易からぬカを與ふべきは、我等の深く信じて疑はぬこころであつて、蓋し一たびこの書に眼をさらす人の、必ず又思ひを同じくする所であらう。

○

最後に、私は只一語を殘して置く。曰く

光は東方より！。

この語が、この書に於て何を意味するかは、姑く諸君の判斷に委ねよう。

言葉の奥にゆらぐ人の姿

聲貌の物語る生活の内容

『かうして靜かに物の本に親しんでゐるこ、書中の人の風丰が面たり相見るやうに目の前に浮んで來る。』

それは少壯の頃、私の尊敬してゐた或る先輩が、論語の義解やうのものに筆を染めてゐた當時語り聞かせた一語である。今は世に亡き人こなつたが、些しの疑ひをも容るゝ餘地のなき確かさで、きつぱりこさういひ放つた言葉は、懷かしき人の面影こゝもに、永く私の眼前に搖曳するのである。

豫て書物の上なごで、さうした概念的の言葉に接したこゝは無いではなかつたにしても、まだ確こそれを實現させた覺えのなき者が、權威ある人の口からいきなりさういひ聞かされた時の驚きは何に譬へよう。先方はきつぱりこ眼前の事實を物語つてゐるに反し、此方は纔かに只何處かかう頭の隅の方にでも殘つてゐるらしき智識の破片を捜し出さねば見つからぬこいふ有樣、その上に羞耻の念や慚愧の情が一しよくたにこんがらがつた歯痒ゆさもごかしさ。淺薄に只物の上べや表皮だけを見て、好い氣になつて素通りをしてゐた者が、ごうでも一度は突き當らねばならぬ場面であつた。

だが、こゝで相當のいらへこゝもに、それから先の話を進めて行くこゝのできなかつた不束な身に取つて、先輩のこの言葉は、久しい間私を策勵して止まぬ鞭こならずにはゐなかつた。さやうにして、何時しか次第に彼方の心が此方の心に宿り、此方の心が彼方の心に融け入つて、映るこもなく相照り合ふ時に、彼もなく我もなく、其處に一體の姿を見出し得る歡びを味ひ得る日は來たのであつた。

かくして後、私の學び得たこころのこゝは、眞の敎育は方法や手續を敎はるこゝに依て、その形式を眞似るこゝではなく、地を易ふればその人の心の裏にある或る何物かを爆發せ

しめて、その人自からその境地を推し開く機會を與ふるにあるといふことであつた。

○

これは又お互の間で折々聞かせらるゝことであるが、まだ相識らぬ人の文章などを讀み、或は公開の演說でも耳にしたことが緣となり、何處かに共鳴を感ずるこころがあり、若くは大に感動する所でもあつて、進んでその人に私淑する風な心懸けでゐた者が、後たまゝ何かの機會に、直接その人に會見して見ると、案に相違したことでもあつたといふので、すつかり愛想をつかして了ひ、前とは反對に、飛んだ食はせ物であつたなどゝ、攻擊の語氣を漏らすやうな人が往々ある。中には尊信をうら切られた口惜し紛れに、殆ど仇敵呼ばはりをせぬばかりの態度を執つて憚らぬのさへ無いではない。この類の事件は、新聞でも見てゐると、個人的にも集團的にも、隨分珍らしからぬ例である。

大抵の場合さやうに指摘され排斥さるゝ方の側に、何處か必ず過不及の跡のあることは間違ひなき事實でもあらう。そこに悲しむべき人間の半面が存するのである。それが公人

であるにもせよ、私人であるにもせよ、若し果してその地位その聲名に相應しからぬ事實が現に存在するとならば、堂々と鼓を鳴らして之を攻むべきである。それに就て毫も曲庇する必要はない。

だが、それは對手方に表裏反覆のあつた場合でなければならぬ。さうでなくて、さやうに指彈する側の者が、自己の不明から、一度は之を過信し、後また卒かに掌を反すやうに之を攻擊するのみか、漫罵自から快を貪るやうであるならば、顧てその人自からわが面上に唾きをするの類ではなからうか。曩には明星よスターよと一代の寵兒を以て扱はれた人が、一朝何かの事件に遇うて毀譽全くその所を異にするが如き例は可なり少くない。目あき千人、盲目千人といはるゝほどに、混沌たる社會意識は是非もなし。唯だそれに光りを投じて之を導くべき地位にある人達が、やはりさうした言議をなして愧づることを知らぬならば、いかばかり片腹痛き業であらう。かゝる場合人また動もすれば、『神ならぬ身』などいふ言葉の蔭に隱れようとするが、それならば獨り對手方にのみ表裏反覆を責むることは、

片手落に過ぎぬであらうか。矢面に立つ方の側が嚴肅なる批判を受ぐべきものこするならば、批判を下す側の者先づ宜しくその不明を公衆の前に陳謝すべきであらう。さはなくて徒らに對手方のみを責めて、恬然自から知らぬが如き風を裝ふこころに、陷り易き無耻の大なる缺陷が横はつてゐはせぬか。一般的には、それが今の世に批判の權威の重んぜられぬ原因を爲してゐるでもあらう。

私は今こゝで事々しく批評に關する論議をしようこするのではない。お互に自らを知り、併せて他を知るの明を養ふこをいはうこするに就て、言たま〳〵こゝに及んだまでゝある。それが萬一にも批評論に資益する所あるならば望外の幸である。

又思ふに、或る對手方を指して批評の矢を放つ人達の身を置くこころが何處かこいへば、何時でも民衆の水平線が指さゝるゝやうである。好し、民衆の水平線は結構である。だが、そこから出立して、進んで代表的の言葉を放つこころの者は、その人卽ち個であるこ同時に全であらねばならぬ。素よりそれが優越者を以て自から處らぬにしても、すでに一歩を抜いて立つた時は、何時でも全體の代表者を以て自ら任ずる覺悟があらねばならぬ。さなくして、若し都合の悪い時だけ直ぐ民衆や輿論の蔭に逃避するやうであるならば、そは餘りに卑怯の沙汰こいふべきである。具體的の例を借りるならば、一國の代表を選ぶ選擧人は、被選擧人の候補者たるものゝ良否を識別するの明がなければならぬ。さなくば、選擧人たるの資格を疑ふべきである。少くこも、選擧界のリーダーを以て任ずる程の者は、一切の材幹に於て被選擧人の候補者を識別し簡拔するだけの明がなくては務まるまい。推薦した候補者が當選の後、一向つまらぬ人物であつたのでは、推薦者も選擧界に對して信用を失墜せねばならぬ。平軍の扇の的を射た那須與市の聲名は高いが、若し渠を選び損ねてゐたら、渠の推薦者は永く後世の嗤はれ者こなつてゐたであらう。

言語や文章は、之を聽き之を讀み行く間に、主張以外その人の全人格が、脈々こしてそ

の表裏に搖曳するものである。技倆や材幹も亦、之を働かす間に、その人の全器局が否應なく露出するものである。博辯宏辭、巧みに人を魅する文章や演說をやる人はあつても、依て人の生活を根本より左右するほどの力を備へた政治家や、宗教家や、思想家は何處にあるのであらう。言は詘に、行も亦決して敏慧ではなかつたに拘はらず、世に在る間、常に一鄕の人に仰がれ、匹夫卑婦の間にさへ『あの全うなお方！』と稱へられた人もあつた。さやうに人間の心には、善惡正邪必らず相感應せずには置かぬものが植ゑつけられてあるのである。然るに尙ほやゝもすれば、一時の評判や聲譽に眩惑せられて、その底を流るゝ心術や表裏を貫く全人格を視ることをしないで、他日臍を嚙むの類に陷る者のあるのは何がためであらうか。

人を知るの明こいふことは、洵に人間の生活に取つて重大なる楔子である。それは啻に一人一個の性命を全うする所以であるばかりでなく、時勢の流れの急なること今日のごとき世に立つて、敢て大事を擔當しようとする者に於て、一層力を注がねばならぬ事柄である。而して我々お互はその地位の如何に拘はらず、何處までも完全なる生活を遂げたいとする意志がある。その志を遂げようとするに就て、進むにも退くにも常にその決定をなすところのものは、いふまでもなく彼を知り又己れを知ることである。

○

前の二例は、專ら主客の地位の定つた場合に就て言葉を立てたのであるが、群居して社會を成して居る人間の地位は、必ずしも常にさやうに此方が主で彼方が客であるとは限らぬ。活ける形勢は千變萬化、主客その地位を異にすること、未だ曾て何人の豫斷をも許さぬものがある。それは日々の各人の生活が、如實に之を物語つてゐる。我々の群居してゐる社會は、正しくそれである。其處では、靜かに本を調べる間を待つてもくれなければ、對手方を選擇し合ふ隙もない。刹那々々に觸るゝ限りの者が、互に主となり客となるのである。そこに考慮を用ふる暇もなければ、素より後から〳〵と訂正し行く餘裕などのあらう筈はない。

人々はそこで、如何に他を觀察し、又如何に自己を表現せしめようとするであらうか。或は自己が如何に他から觀察され、又他が如何にその己れを表現するであらうか。出會ひがしらのその場〳〵に、捌きのついて行くこともあれば、結んで解けぬこともあり、解けて結ぼるゝこともある。其處を如何にこの身を處して行くか。案ずれば限りもないが、さりとて備へをせぬ譯にも行かぬ。何うすればよいのか、何うもせぬでよいのか。何さま人間は皆生きて居る。實に勞苦の世界でもあるが、興趣のつきぬ世界でもある。

それに就て、こゝに好個の適例とすべき實際の舞臺がある。それは、共同浴場の客となる場合である。

人々は皆混沌とした社會に生を營んでゐる。その混沌たる中から、各互に安住の地を得るために、家を設け、村を作り、町を成し、都を立て、國を建てゝ、而して大なる世界を組織して居るのである。この社會生活に於て、人は日常如何なる場合にも衣服を着用して居らぬことはない。その上さま〴〵の階級や差別が引つ切りなく纏ひついて離れぬのであるが、特に入浴の場合だけは誰もが皆一樣に赤裸々の自然人となつて、同一の場所で平等の生活を實現するのである。それが日本に行はるゝ共同浴場の天地である。

いふまでもなく、こゝでは、貴族と平民の區別もなければ、有產者と無產者と、乃至富者と貧者との區別も何もない。たゞ男と女とだけは明治年間以後はつきりと區別されたが、その他は一切の差別から離れて、何人もが生れ出でた時のほか相見ることのできぬ姿となつて、同一浴場の客となるのである。天下いづれの處にか、これほど平等一如の世界があらうか。人若し平等の天地を好むならば、宜しく共同浴場に行つてその理想の現實化を樂むべきである。

人或は、その制度が非文明式だなどゝハイカラな議論を挾むかも知れぬ。だが、それは自から別問題であつて、それに對しては、一國一家の溫かき國民性を陶冶するに與つて力ある釀槽であることなど、彼れ此れ立言の餘地は幾らもある。しかしそれら是非の議論は、

今こゝでは全く問題の外であつて、私は只誣ふるこゝのならぬ事實を根據として立つ。

我が共同浴場では、誰もが絶對的に赤裸々の人となり了ること、すでに誣ふるこゝのならぬ眼前の事實である。

ところが、それも亦ほんの外觀から見た只一面の事實であつて、さやうに平等の姿をとつたそのまゝ、一人々々個々別々の人格が、同じく又赤裸々に表現するのである。一面はさやうに全く平等一如の姿を暴露しながら、萬人皆そのまゝ何うすることもならぬ個別性を以て立つて居る。平等卽差別の儼然たる事實は、はつきりと此處でそれを見ることができる。

見よ、さうした赤裸々の彼や此やを相較ぶるならば、體格の長短から大小、筋肉の强弱や肥瘠や、皮膚の色の同じく黄なる中にも、秀でゝ白い者もあり、すぐれて褐色の强いのもあらう。乃至語默や擧止動作の緩急や、弛張や、鋭鈍さが、一顰一笑の間にも絶えず赤裸々の身の各部の線の上に、或は粗く、或は細く、現はれないでは居らぬ。かの藝術の習作をなす人達は、人體美を描くために特に裸體の人を傭ひ來るのであるが、こゝでは畫面にそれを寫すことは許されぬが、人々自由に行動するまゝを、自由に相互の眼に映ぜしむるのである。公人にもせよ、私人にもせよ、屋内と屋外とを問はず、衣服を纏ひて威儀を整へてある時は、おほかたの人は全然修飾なしにはあり得ぬのであつても、此處ではさうした一切の物を除去してある故に、決して欺かるゝなどいふことはあり得ぬ。さやうに凡てはそのあるがまゝを暴露せしめてゐる。

そこで問題は、赤裸々なる體軀を通してその内に外に、如何なる人格美を表現するかといふことゝ、同時にいかにそれを誤りなく觀察し得るかといふことに歸着する。卽ちこゝでは、前の例のやうに言語文章に誤まれたの、邊幅が何うのといふが如き、責任の全部を對手方に嫁して、此方だけが無責任の地位に立つが如き好きな眞似をなし得る餘地はなく、有意識にもせよ、無意識にもせよ、互に暴露したそのあるがまゝの姿態に依つて、互に又

思ふまゝの觀察をなし得る徹底自由の天地に置かれてゐるのである。若しそれを好まぬ者があれば、個々別々の浴場に行く外はない。

○

極めて一般的に申しても、彼我の體格や健康の狀態は否應なく誰の目にも止まる。更に進んで、仔細に各個の性美や人格美に留意する者があつても之を拒む譯には行かぬ。女湯などでは、定めて頭髪や化粧のことにまで立入つて、その巧拙や良否を語り合ふでもあらう。反對には、何等他のそれに觸るゝことなく、自己の入浴以外殆ど無關心なのもあらう。同じ無關心でも、わざと遠慮から出た無關心もあれば、自己中心の無關心なのもある。虚心平氣な少年の如きは、浴場を以てさながら解放されたる溫かきプールとでも心得居るかの如く見らるゝのが彼等の常ではないか。成人であつても、自分一人のために設けられた所であるかの如く傍若無人の振舞ひをなして憚らぬ者もないではない。下半身のかよわさからいへば、氣の毒とも憐れともいひやうのなきほどの身であつても、觸るれば切れるかこばかり肩肱張らせて、他の注目をあつめてゐるのも往々見かける圖であり。或は浴場を一種の社交倶樂部とせるかの如く、得意の雜談にうつゝを抜かしてゐるなども、其處此處で見受けらるゝ。總じてそこには、手に取るごとく個性が暴露すると同時に、家庭の風儀や平生の教養から、地方的色彩や、時代の好尚などが、悉く手に取るごとく看取し得らるるのである。それが皆用意不用意を問はず、一切が自他互ひの前に暴露するのであるから、何人も之を何うすることもできぬ。まさしく活きた人間を赤裸々にした自由の展覽會であるといへる。

もつと深く立入つて、個人的の性格に眼を注ぐならば、逐一精細なる觀察をもなし得るのである。けれども、其處はやはり一種特別なる公開の祕密室である故に、濫りに之を公表することは慎まねばならぬ。若し特異なる一例を借ることを許すならば、嘗て或る浴場に於て見かけた一老人は、珍しくも位牌の代りとも石塔の代りともいふべき文身を腹部に彫りつけてゐたのである。上部には『南無阿彌陀佛』の文字を、その下部には兩性の戒名

を、それが圓き線を以て圍まれてゐるのであつた。どうしてかくも念入りの文身が刻まれたであらうか。風丰動作から推せば、極めて素直な寧ろ優し氣にも見らるゝその人が、之を文身にしたほどの執心から推せば、兩個の戒名の主の冥福を祈念することに於て、必ずや淺からぬ感激の結果であらうことは、誰が目にも想像され得るのである。何さま生ける身をそのまゝ石塔に代へた宗教的信念にまで立入つて行くならば、さまゞの想像がそれからそれへと馳せられぬでもない。少くとも時代劇の一齣を組み立つるくらゐのものは横はつてゐるであらう。

天才は鼻のかみやうにも現はるゝといふ諺がある。一切の行動は、皆衷なる人の表現である。物の二三十分間も浴場にある間に、何うしてその本質を祕し得ようや。若し物思ひに沈んでゐる人であるならば、それはそれで又その人を語るものである。かくして、浴場は何時でも赤裸々の人間の展覽會が催されてゐる。

○

平等一如の共同浴場に於て、餘蘊なく發見する個々の人格的價値が、平面的に排列さるべきばかりでなく、同時にその人格は又立體的にスケールの大小もあれば、自からその品質に高下粗密の差の蔽ふことして蔽ふことのできぬものが、儼然として存在することを知り得るであらう。

この關係、この事實が、いよ〳〵鮮明に領解さるゝならば、今度は逆に之をそのまゝ浴場外の天地に移し來る時に、日頃人々の強く恃みとするところのかの社會的地位や、聲譽のごときものを判斷の資料として、彼此紛々の思ひを滋からしむることの、今更廻りくどき感じを起さぬであらうか。況や一席の言辭や、身の外を包む衣服調度の末なごに心を奪はるゝことの、いとゞ淺ましく愚かであることに瞿然として想ひ到ることがないであらうか。

さて、さうした曉、人を知るに就てその恃むところのものは何か？

この場合、多くは又反動の勢に驅られて、知らず〳〵逆行の態度に出ようとするのが、おほかたの常かも知れぬ。豈知らんや、庸俗の蹤を追うてその顰みに倣ふことが太だ莫迦々々しきと同じく、無暗にそれに反抗し逆行することも、亦同じくそれと相對立したものに過ぎぬことを。今の世に流行する階級鬪爭熱のごときも、その多くはこれに類似するものであることを思ふ時に、その價値の大半が削減せぬであらうか。私は今又こゝで横道に外れて、一々それらの是非や當否を云々するの暇を有たぬが、總じて右傾が非なりとするならば、左傾も亦是とすべきでない。因襲に囚はるゝことを陋とするならば、新を競ふことも卑しむべきである。

翻つて浴場の場合にしても、實は赤裸々の皮膚を暴露したから、それで必ずしも心の奥底が見らるゝ譯ではなく、衣服その他の外物に眼を寄することに慣らされてゐたその囚はれから脱して、すつかり着眼を新たにする機會を得たゝめに、今まで心附かなかつた點を新たに發見し得るに過ぎぬのである。而してその觀察の眼をいよ〳〵深部に徹せしめようとするには、それだけ深き觀察の力を要することはいふまでもない。さうでなければ、裸體は單に裸體として見ゆるに過ぎまい。機會が新たにされても、用ふべき觀察の力がないならば、恐らくは依るべき外粧が除去されたゞけ、却つて觀察の不便を感ずるかも知れぬ。幸にこゝで新たなる何物かを掴み得たであらうならば、そのまゝその眼を浴場の外に移す時、纒に身に纏ふところの外粧や、又それにも似た社會的地位や聲譽のごときものに眼を奪はるゝがごときことなく、却つてそれは、此方の觀察を補うて之を確むる有力なる資料と化するでもあらう。

併しながら、如何なる場合にも失うてならぬものは、此方の心である。こいつて、豫め待設けた推斷の心を以て彼方を眺むるならば、それは着色されたる故造の作品であつて、その眞相を照らすことは愈よ遠いとせねばならぬ。特に懼るべきは、さやうに觀察の眼を用ひようとする時に、この身自身が、かの憚るべき探偵業者のそれにも似た忌はしき心術を持することころの態度に陷ることである。月を宿す水は澄みて清らかに、物を照らす鏡は

研がれて汚れなきものであらねばならぬ

○

いづれか主、いづれか客ともつかぬ場合、縱横左右變化してやまぬ所にあつて、やゝ滯りなくその觀察を自由になし得るに至つたとするならば、試みに乘合の電車に於て之を施し見よ、若くは汽車の乘客に施し見よ。之を試るがために、向ふに見られて下車を忘れ、或は人に突き當るがごときことなく、出入應酬自然に宜しきに適ひ、往くとして可ならざるはなきに至つたとする時、尙ほ念々常に我が心の狀態を檢し見よ。沾々として、我れ自から些少の器量を恃むがごときものあるならば、何時小石に躓くことがないともいへぬ。衆の仙人が、物洗ふ女の脛に、その身の存在を忘れた例しもある。

明治維新の際、その處置を朝廷に一任して、臣下の勸むる罪の赦減を請ふことも肯かず、平然としてその爲すがまゝに委ねた德川慶喜公は、後年世靜かなる日、ときめく人々と共

に澁澤子の客室に招かれた時にも、求むる所のなき群を離れた天の成せる品格は、超然として並みゐる人々の上に高く秀でた氣合ひ、杯盤の間を周旋した賤妓等をも感歎せしめて止まぬものがあつたといふことである。

聲高らかに歌を唄つて門を過ぎる者のあつた時、その聲を耳にするや否や、『あれ、あの男は聲張り上げて唄つて通るが、遠く行く間もなく斃れて死ぬる！』といつたその言葉まだ終るか終らぬかに、途上に騷ぐ音を聞きつけた家人が出て見ると、果せるかな、今歌を唄つて通つたばかりの男が途上に斃れたのであることを知つて、不思議やら氣の毒やら、人々驚き合うたといふ話を、少年の頃故老からいひ聞かされたことであつた。

何うしてさういふことが豫知されたか？、その手續や徑路を問ひ糺さなければ氣の濟まぬ人に、一應や二應それが語られたからとて納得ができようか。又それを聞いたゞけで、直ちに豫斷の眞似ができようか。人皆同じ言語を操つるやうであつても、聲色はその面の

ごとく千人が千人、萬人が萬人、皆悉く之を別にするのである。それであつても、喜ぶ聲、怒る聲、悲む聲、樂む聲、笑ふ聲、嘲る聲、謙る聲。尊大自ら傲ぶる者の聲、優しきやうであつて劍をつゝむ聲、無調法なやうであつて却つて信ずべき聲、朗らかなる聲、欝した聲、陽氣ではあるが底力のなき聲、濁れる聲、凉しき聲、誰もその說明を聞くことなくしてそのまゝに之を領し得るのである。聲の主も亦未だ曾てその說明を施すことはしないが、有てるほどの力は卽ちそれ〴〵に發現するのである。更に少しく仔細に注意する時に、その聲が唇邊より漏れ來るか、咽頭より來るか、將た肺腑を衝いて出て來るか、或は全身の力を帶びて來るか、それとも割れ鐘のやうな聲であるか。兎にも角にも、その聲が適當の場合に用ひられた場合、必ずそれだけの用を果さぬことはない。見よ、床上に呻吟する病者の細き聲が、いかに人の肺腑に滲み渡るかを。又見よ、聽官のよく發達した者が聽き得ぬ聲を、却つて耳の聾した者がよく之を聽き分くることさへ實際にあるのである。

言語の物語る人格もある。風丰の物語る人格もある。逆に人格の物語る言葉もある。人格の現はす風丰もある。反對には片々として何を現はす力のないものもある。その一々は、その時々に心を用ひて之を見分くる外はない。

○

人々は今この書に於て我が、川合信水先生から何物を領したであらうか。私は之を手にした多くの人々から、その領し得た反響の數々を聞くことを樂みとしたい。この反響を待ち設くる身として、わが目、我が耳、我が思ひに存せる數々の中から、唯だその一を書き贈らう。

或る時、先生を見送つた年若き一人の女子は、後に私に語つた。『先生の蹤から跟いて行きますと、歩いて行かるゝこころには、絕えず新しい道が空氣の中に開けて行く心持が致します。』と。

年齒も行かぬ若者の目にさへ、さやうに深く强き感動を起さしむる先生の風丰は、實に

道に行き交ふ人をさへ振返らしめて、思はず心の襟に手をつけしむるものが常に漂ひ溢れてゐるのである。

先生の體驗に得られた言葉は、すでに人々の讀めるところの如くである。その言葉が、その風丰に現はれ來る時、如何なる力を示すこするか。

さて顧て我々自身のそれは如何。

語らず、いはず、その聲きこえざるに、天のはて地のはてにまで及ぶものゝ姿は奈何？。又その實體は奈何？。我々は、ぴつたりこそれに合一し得るここに於てのみ、この生を享けた意氣が全うし得られる。又そこに大なる生命の意志がある。而して人も國も世界も、さやうにあり得るこ否こに依つて、存亡の運命が決しられる。この故に之を大事こは申すのである。

大正十四年八月廿五日印刷
大正十四年九月一日發行

【定價金壹圓八拾錢】

編者　大阪府三島郡吹田町七九四　岡田次郎
發行人　大阪府三島郡吹田町七九四　岡田汪雄
印刷人　京都市丸太町川端東入上ル　藤澤淨圓
印刷所　京都市丸太町川端東入上ル　同朋舍

發行所　大阪府三島郡吹田町　振替口座大阪四九七二六番　生々社

不許複製

生々社綱領

我が生々社は、志を同うする者が、相依り相輔けて、相與に學び、相與に習ひ、與に共にその本分を全うすることに資益するところあらしめたい願ひから結合した一團である。

◇

教學に於ては斷じて成形の一宗一派に拘はることなく、素より亦思辨の上に於て何等の主義にも累はさるゝことなく、各員只天下の大道をその身に體し、而して之を世に行ふことを以て我等の要義とする。

◇

如上の志を達せんがために、隨時講學並に自他世務の相談をなし、毎月一回雜誌『焦點』を發行する。『焦點』には、各自のおとづれを寄せてその消息を交換する。

◇

時節到來せば、特に修道に志ある學生や一般青年のために、適當の地に塾舍を設けて之を收容し、出入起臥の間に薫育を施したいと望んでゐる。

所懷を陳ぶ

大戰の後を承けた世界の諸國民は、今猶ほ擧つてその餘弊の始末に腐心せしめられてゐる。敢て遠くに求めずとも、我が國民の生活は如實に之を語つてゐる。かくの如きは必然の成行であつて、毫も怪むには足らぬ。

知らず、大戰の直後、聲高らかに呼ばゝれた『世界改造』の標語や、又それを叫んだ雄大なる意氣は、今いづこに消え散じたか。

之を個々の生活に徵しても、又歷史の過程に察しても、人々國々が經濟的に安固なる獨立自治の上に立たねばならぬことは、餘りに明白である。併しながら、それは纔かに只存在の第一歩に過ぎぬ。卽ち人も國も常にその上に立つべきであつて、その下に喘ぐべきではない。只一の線であるが、上に立つのと、下に喘ぐのとでは、其處に大なるけじめを生ずる。

我々は如何なる場合にも、過ぎ去りたる跡へ逆行すべきではない。背後を忘るゝことはならぬが、目も足も手も、前面に向つて具へられてある。

個々の生活のためにも、國の生活の上からも、各が深く自ら修め且つ後進を養はねばならぬことは、餘りに明白なる任務である。

我々が生々社を起したのは、紛々たる世の擧みに倣うて事を爲さうとするのではない。少くとも、來るべき時勢を洞觀し、更に新たなる時勢を捲き起すに足る國士を造るところに希願を抱いて居る。

この志を同うする人は、請ふ互に手を援つて事を共にしよう。

大正十四年九月

生々社主幹

533
92

終